

かい ろう ろく

戒老録——自らの救いのために

¥ 570

昭和47年11月10日 初版発行

著 者 曽 野 綾 子

発 行 者 黒 崎 勇

発 行 所 祥 伝 社

東京都千代田区神田神保町3-7

ニュー九段ビル 〒101

☎東京 03 (265) 2081 (代表)

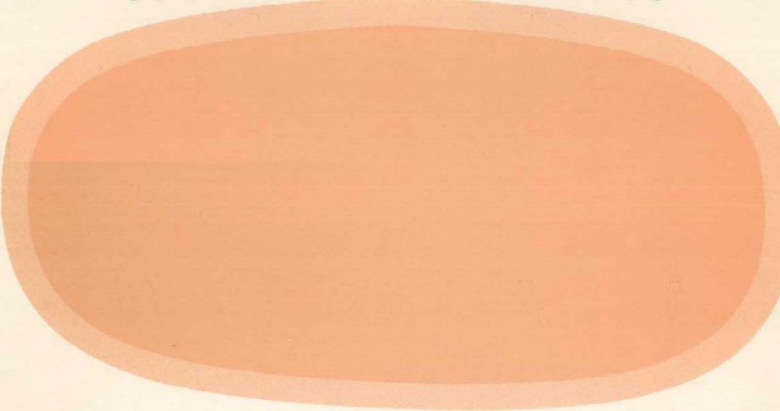
発 売 小 学 館

印 刷 大 日 本 印 刷

製 本 大 日 本 製 本

万一、落丁・乱丁がありました節は、お取りかえします。

Printed in Japan. © Ayako Sono



戒老録

自らの救い

曾野綾子

まえがき

——自己救済の試み

計画どおりの人生はあるのか

いつの頃からか、私は自分の老いを戒めるものを書いておかねばならない、と思い始めていた。その芽は、私が三十七歳の誕生日を迎えた日に発していたように思う。その日私は「さあ、これで、私も人生の後半に入ったのだ」と自分に言いきかせた覚えがあるから。

私は自分の若さに対する執着をあまり感じたことがない。若さは、未熟で、なんとなく恥ずかしかった。滑稽でもあった。安定という点でなら、私は二十五歳の自分よりも、三十七歳の自分のほうが、まだしも少しは信用できるように思った。

二十五歳の時、私は何と狭量だったか。狭量さのことを、人々は純粹というのだろうか。私はある意味では、暗い育ち方をしたから、幼い時から純粹であったことなど一度もないような気がする。私は純粹でもないくせに、ただ狭量であった。

それが四十歳に近くなるにつれて、少しそうでなくなった。それは私が、他人の立場を推察できるという技術を、遅まきながら、少しずつ身につけるといえることができるようになったからであろう、などというところ、何とかいいことを言っているのだろう、と我ながら思う。つまり、私はそれだけいい加減になったのだ。いい加減な自分を容認するためには、都合上、他人のいい加減さも認めなければならぬ。私はほんの少しだけ、確かに、どの人にも、その人がその人である必然的な理由が背後にある、と実感として思えるようになった。それで私はいよいよ考えの筋道に混乱をきたし、歯切れが悪くなり、反社会的になった。

しかし、この混乱を、私は実は味わいながら受けとめている面もあった。他の人のことは知らないが、私にとって、年をとって、世の中が見えて来る、ということとは、この新たな混乱を正視する立場に立たされることだ、と思ったのである。私は若い頃より、複雑に、何重にもなった物事の裏を考えられるようになった、と思った。ということは、しかし、物事の背後には無限の深みと隠された部分があることがいよいよ見えて来るということ、私は一足前に進むごとに、ますます見えない部分があることがわかるだけであった。四十にして惑わず、という言葉は、私の実感によれば、一段、表現に省略が行なわれていると思う。四十になると、とうてい先を見尽くせぬという絶望がかなりはつきりするか

ら、多く望まなくなって、したがって、最善ではない、次善かその次くらいの道を淡々と選べるようになるのである。

私は人生の後半にさしかかって、決してもう若くはないけれど、老境を理解するまでにはまだまだ遠い。老人の心をわかったなどと言ったら、私は先達^{せんだつ}たちに非礼を働くことになるだろう。

現実とその予感とは明らかに違う。しかし私はその予感に捉^{とら}われたのであった。あるいは身近に、親たちの世代と暮らして、年をとるということのむずかしさを、しみじみ味わったからかもしれない。

どういう年寄りになりたいか。私は折りにふれて考えるようになった。年をうまくとるという作業は、年をとってからでは遅いのではないかと、私は思うようになった。子供の時に、大人になる準備をするように、老人になるために、人間はもしかすると中年から、多少学ばねばならないのではないか。もっとも、準備したからといって、決して「備えあれば憂いなし」ということにはならない。今の老人の世代も中年の時、戦前の日本の社会形態をもとに老年の生活設計をしたはずであった。お金を溜^ため、自分が姑^{しやうとめ}に仕えてやって来たように、自分が年とれば、また、嫁が仕えてくれるだろう、と考えて来たに違いない。

經濟上でも、意識の上でも、彼らはことごとく計画が狂ったのだ。

しかし、私はその点で、その世代の人たちに特に同情しようとは思わない。逆に、計画どおりになった人生などあるものだろうか。

若さを保つ方法などありはしない

私の子供時代に、大きな心理的な影響を与えて去った第二次世界大戦は、あらゆる思想、国家形態がくずれるさまをありありと見せつけた。私は予測のできぬことと、崩壊の感覚に馴れた。もう一つ、そうした混乱の中にあつては、ごく限られた偉大な意志の持主以外、庶民はすべてその根本の姿勢において卑怯者になるほかはない、ということも知つた。この私の考えはまちがっているかもしれない。しかし、それだからといって、私は厭世的にもならなかったし、いわゆる人間不信にも陥らなかった。それが私の——貧しくはあつても——人間把握の一つの方法であつた。

今、私は自分の老年を展望するつもりでいながら、それがまったくの、無駄な作業であるかもしれないことをしみじみ感じている。

第一に、私のこのメモは、平和な状態を基本に考えられていることである。しかし、私は三、四十年後に、戦乱の荒野に立っているかもしれない。そんなことがあつてはならな

いことだが、平和において考えられる不安や憎悪は、戦乱の中ではまったく影をひそめることもあり、新たな動物的な人間関係の生じることもある。

第二に、私は生きていないかもしれない。老年を体験しないということは、一種の貧しさであるが、それも人間の運命の中に組み入れられている。そして老年を迎えないものが老後の心配をするなどということは、杞憂^{きゆう}というより、滑稽である。私は本当は怠けるのが好きで、必要なことでもできればしないでおきたいくらいだから、生きないことがわかってゐるのだったら、決してこんなよいなことはいらないと思う。しかし、人間は、滑稽な、ごくろうさまなことも、時にはするはめになってしまう。

私が実際に一冊のノートにメモを書き出したのは、一九七一年の十一月だが、それはまんざら偶然ではないように思う。一九七一年の九月に私は満四十歳になった。私はその時ヨーロッパにおり、十月の末になって日本に帰って来た。このヨーロッパ旅行では、私はアウシュヴィツに立ち寄り、激しい衝撃を受けた。私は生まれて初めて、といていいほど、神と人間の問題を重苦しく考え続けた。その翌月から私は、こんなものを書き出したようである。

その時、私は「四十にもなったのだし急がなければ」と思ったことを覚えてゐる。それは、いつでも書けると思つてゐるうちに、私の自分なりに思い描いてゐる老人像と現実の

私がくつついて来てしまいそうに思えたからだった。

よく年寄りには「若い者に年寄りの気持ちにはわからない」と言う。まったくそうなのだろう、と思う。その場合の若い者というのは、他人である。しかし私は一つの実験のように年とってから、自分が四十歳の時に書いたものを読みなおし、未熟な考えや気負いをふりかざしていた自分の若さを自ら告発すべきように思ったのである。

同人雑誌に加わった十八歳の時以来、私はまとまったものを、ノートに書きつけたりしたことはなかった。私の小説を同人が雑誌にのせてくれるかうれなかわからなくても、いつか誰かに読んでもらうためにも、原稿用紙に書いていた。それが今度ばかりはためらうことなく、ノートに書いて、誰にも見せなかった。

そういうものが活字になることになったのは、さまざまな時の流れによる。怠け者の私は、その流れにのることを、はじめかなりためらったが、結局は、出版してくださるという方の言われるとおりにした。一般的な身の処し方として、私は何かに流されるという感覚ほど、気楽で好きなものはないからである。

若さを保つヒケツとか、私の老化予防策などというのを、新聞や雑誌から聞かれるたびに、若さを保つ方法などありはしなないと思っていると答え、老化予防に関しては私なりの戒老録を書いています、と答えていたのがこの本が印刷されるようになったきっかけであ

る。もともと「戒老録」などという、ものものしい表題をつけることはいざとなると困ると思った。「戒老メモ」はどうでしょう、と私は提案し、出版社に「締しまりが無い」と断わられた。ああそうですか、とこの時も私は引き下がった。私はいつも本の内容は多少気になるが、表題になると、どうでもいいような気がしてしまうのである。

しかし、私は今でも、この本を出すことにためらいを感じている。それはこの本が、一見すると老人を告発するような要素を含むようにみえるからである。私は本屋さんが、この小さなメモを六十歳以上の方々には売らないことを希ねがう。本当ならそれを表紙の一部にでも「書店さんへお願い」として刷り込みたいくらいだ。しかしそのような言葉は、逆に一種のキザな宣伝の文句だと思われるだろう。だから、私は何も言わないつもりである。

人を信じることと信じないこと

先にもふれたように、この本はあくまでまだ非老人である自分に向けたものである。決してこの中の条項に当てはまらない年とった方々に向かって、その非を鳴らすために書いたものではないし、また、この内容がまかりまちがっても、若い世代から、老人への非難の道具に使われるようなことだけはやめてもらいたい。

しかし、本当のためらいの理由は別にある。私は今までに自分の運命を左右するような大きなことでは、予測どおりになったことが一つもないのである。希望が叶えられたことはある。しかしそれは予測ではなかった。この事實は、私に、改めていやな予感を感じさせる。私はこのメモの中に、きわめて個人的な趣味による願わしい老人像を書いた。予測が一つとしてそのとおりになったことがないので、その前例を踏めば、私はそのような老人になれないわけである。私はまったく違った種類の精神を持ち、このようなものを書いた自分の分身に対して激しく怒って牙をむくのであろうか。

何もこんな愚かしいことをしなくてもいいはずである。しかし——私はこのごろ、しだいに愚かしさも好きになった。迷ったり、愚かしかったりすることがなかったら、それは、もはや人間ではない。人間を信じることと同時に、人間を信じないことも必要である。人間を信じない人間だけが、あるがままの人間を認めようとするのかも知れない。私はまったく信じられない自分を前に引き据えるほかはない。

このメモは、先にも述べたように、きわめて閉鎖的な、個人的な、しかも利己的な視点の上に立っている。私もまた物心つくと同時に心理的に二重視ぎみの性格であった。社会の一員として、市民の一人として考えたり望んだりすることと、個人として考えることが、一致したことはまずなかった。

私はこの日本をいい国だとは思うが、およそ国家とか、社会とか名のつくものを、どうしても根本から信じることはできない。なぜかと言えば、それらは組織上、人間を集団として扱うが、人間は集団の一員としては決して根本から解決されないものだからである。

かつて、私の知っていた老婦人が、動脈硬化で倒れ、死までの一年ほどを、医療保護患者として病院に入院していたことがあった。彼女は、物事はわかってはいたが、口もきけず身動きもできなかった。病院ではおむつを二十四時間に二回とり換えていた。それ以上は、人手がなかったのである。したがって彼女が乾いたおむつをあてがわれていた時間というのは、ごく短かったに違いない。彼女には何もなかった。体力も、表現力も、金も……私は、そのような患者には、規則として、一日に六回以上はおむつを変え、それを義務づけてほしいと思う。私にはよくわからないが、人権、とはおそらくそのようなものである。少なくとも一九七〇年初めの社会状況はそんなものであった。

私はこのような老人に関する実生活上の不備がなくなことを希望する。そして近い将来には、寝たきりの老人の食事の世話をする人が誰もいないなどということはなく、やうな社会が来ることを信じたいし、それはまちがいに、あり得ると思う。しかし、私はすでに、今までに、衣食住のみちたりた人間の陥る不幸についても見すぎて来た。人間はなんと無限の可能性を持つものであろう。動物として生存に適した環境を与えられれば与

えられるほど、人間の精神はまた別の不満に責めさいなまれることになるのである。三度の食事がまともに与えられないうちは、そのことが、不満の明確な目標になるが、三食食べさせてもらうようになると、その質がもっと大きな不満の種になりうる。人間は孤独にも苦しむが、集団にも憎悪を抱くのである。

社会的な市民としての私は、老後の組織的な収容施設その他を要求するが、個人的な私は、そのようなものを、実はまったく信じない。

きわめて個人的な利己的な立場から、私は老人がまったく自己を失うほどに惚けることについては、ほとんど恐怖を抱かない。自分がそうなればもはや苦しくないからである。申しわけないが、誰かがその点について苦勞するのだろうが、それは私の知ったことではない。それがいやなら、私はどこかへ公然と棄てられるだろうが、惚けてしまっていれば別に淋しくも辛くもないだろうから、平気である。

私が恐れるのは、自分にまだ意識が残っている場合である。老いを自覚でき、主観的に苦しむ立場におかれた場合が怖い。私が何とかして不可能に近い自己救済をしようと試みるのは、そのような、内面的に測定しうる老いに対してである。

このメモを本にすることになった時、私は条件の一つとして各項目毎に、ページに余白の部分を残してもらうことにした。原稿の枚数が足りないから、わざとあちこちを白くし

て、本の体裁を整えたのではない。

ここに書いてあることの、どれ一つをとってみても、私はそれにまったく反対の生き方があることを肯定する。まことに「人生に定説なし」なのである。

おそらくこの真理は、私のメモを読むことによって確実に読者の心に惹起^{ひき}こされるところである。私は正しいと思って書いたのではない。このような生き方が、目下のところ私には「よさそうに思える」からに過ぎない。当然それは個人によって是正されねばならない。余白はそのためである。この本の本当の意味は、めいめいによって書き込まれたその部分にある。私にとってもまた、訂正のために、その余白は必要なのである。

昭和四十七年十月一日

曾^そ野^の
綾^{あや}子^こ

目次

まえがき

——自己救済の試み

3

1. きびしさによる救済

23

他人が『くれる』ことを期待してはいけない……25

してもらうのは当然、と思わぬこと……27

身内なら何を言ってもいい、と思っではいけない……29

自分がこの世で一番不幸だと思うのをやめる……31

他人の生活に口出しするのはいけない……………	34
愚痴を言っていることは一つもない……………	37
明るくすること……………	38
「ひがむ」のは凡庸、意識してやめること……………	40
自分でできぬことは、まず諦めること……………	42
何事も自分でやろうとすること……………	44
若さに嫉妬しないこと……………	46
若い世代の将来には、冷酷になること……………	49
生活の淋しさは、誰にも救えない……………	53
子供が心配をかけたら感謝すること……………	57
嘘をつかぬこと……………	59
攻撃的であることをやめること……………	63
年寄りの自分に対する態度を非難するのは無意味……………	65
同じ年頃とつき合うこと……………	67
定年をくぎりとして新たなスタートを……………	68